

状況行為論に基づく「郷土の先人の働き」学習の開発

小学校社会科第4学年単元「成富兵庫茂安の治水事業」

田本 正一・田本 嘉昭^{*1}

Development of learning of "The work of the local pioneer" based on the situation act theory
Elementary school social studies grade 4 unit "Flood control project by Naridomi hyougo Shigeyasu"

TAMOTO Shoichi, TAMOTO Yoshiaki^{*1}

(Received August 3, 2017)

キーワード：状況行為論、先人の働き、社会参加の仕方

はじめに

本研究では、小学校中学年社会科における「郷土の先人の働き」についての学習（以下、先人学習）について、新たな授業開発を試みる。社会科は市民を育成する教科である。その中で、先人学習は郷土の発展に尽くした人物の業績を学び、郷土への愛着や誇りを育むことを目的としている。主に事例として取り上げられるのが、治水事業に尽力した人物である。そのため、遺跡見学や土運び、工事道具などの観察・体験活動を通して、当時の様子や状況を理解させ、先人の願いや思いを共感させる授業が実践されている。

しかし、従来の先人学習は次のような問題を抱えている。すなわち、第1に、尊敬や感謝という心情形成の学習にとどまっていること、第2に、治水事業などの業績は、その事業を達成した人物の資質や能力に還元されていることである。なぜなら、従来の先人学習では、偉業を達成した人物は「優れた個人」として学習されることになり、その業績に対する無批判な受容、称賛を強要することになっているからである。そのため、偉業を達成するためにかかわった多くの人々や当時の制度や技術、知識等を付属品のように軽視、あるいは無視することになるのである。そのような学習は、学習者が市民として社会の形成に参加しようとする態度を後退させる可能性がある。なぜなら、特定の優れた能力や資質を持たなければ、社会の形成に関わることができないという隠れたカリキュラムとなっているからである。従来の先人学習は、むしろ、学習者に先人との距離を感じさせ、社会への参加を促すことを難しくさせているのである。

上記の問題点を克服するために、状況行為論¹⁾に依拠した先人学習の開発を目指す。状況行為論は、状況と行為を一体として捉える。そのため、行為の達成について、いずれか一方に還元する見方をとらない。先人の業績達成は、その人が埋め込まれた状況に大きく依存する。したがって、状況行為論によって先人と状況とを一体として捉える見方を本小論において採用するのが望ましいのである。

本小論では次の3点のことについて論じる。1点目は、従来の郷土の先人学習は、個人を単位とする一面的な捉え方の学習がなされていることを明らかにすることである。2点目は状況行為論に依拠した郷土の先人学習の原理を明らかにすることである。特に、社会的相互行為の見方から、人と人との相互作用、さらには物質、制度、知識、技術、自然条件などの諸要素と人との相互作用に着目させる。そのような見方をもたせることで、個人を単位として捉えさせる従来の先人学習との差異を明らかにする。3点目は佐賀県の郷土の先人である成富兵庫茂安の治水事業の事例を取り上げ、具体的な授業開発を行うことである。

以上のことにより、「尊敬・崇拝する先人学習」を「社会参加の仕方を学ぶ先人学習」に再構成することを目指す。

*1 佐賀県上峰町立上峰小学校

1. 先行研究の批判的検討

1-1 社会参加の視点を欠く先人学習

社会科教科書における先人の取り扱いについて検討する²⁾。教科書では、布田保之助は熊本県山都町に通潤橋を築き、白糸台地に水を通した先人として取り上げられている。

学習は「つかむ」、「調べる」、「まとめる」の3段階で行われる。まず、「つかむ」段階では通潤橋を通して、誰がどのようにして白糸台地に水を引いたのかという課題を持たせるようにしている。その課題について調べ学習が行われる。「調べる」段階では、白糸台地が深い谷に囲まれているという地理的条件をおさえ、白糸台地あたりの総庄屋の布田保之助が中心となり、石工と協力して通潤橋を完成させたことを調べる。そこでは、工事に携わった人々の努力や願いに気付かせることがねらいとされている。そして、「まとめ」では、布田保之助の業績を紙芝居等にまとめ、発表会を行う。

しかし、このような学習は、布田保之助という先人に対する尊敬や崇拝する心情を育むことにとどまっている。このような学習については佐長健司が既に共同体主義社会科として批判を行っている³⁾。佐長は「共同体主義社会科では学習者は地域や国家のような共同体の発展に尽くした人物や集団の意図や行為、その発展の価値を知るための問題を設定し、その問題解決のための学習を行う。(中略)ここでは、エリートのような個人や集団が政治的決定を行い、共同体が発展してきたことが学習される」⁴⁾と述べている。石工などの技術者集団や工事に協力した村人たちのことを取り上げてはいるものの、中心に据えられているのは布田保之助である。人々の願いに応じて布田の意図や努力が通潤橋を作ったという成功物語として語られ、協力者等はその周辺に位置付けられているのである。

さらに、佐長は共同体主義社会科について「個々の学習者が政治的決定への参加として、社会のあり方や具体的な社会の制度について考える学習を欠いている」⁵⁾と指摘している。つまり、先人への尊敬や崇拝は、その人自身に対する心情形成、あるいは、その共同体への帰属のための心情形成でしかなく、社会形成にどのように関わり、学習者自身はどのように振る舞うべきかを考えさせることは期待できない。したがって、学習者がよりよい市民に成長していくには、従来の先人学習は不十分であると言わざるを得ないのである。

そのような従来の先人学習に対して、笠聡一郎は水利権問題を軸として授業開発を行っている⁶⁾。笠も従来の先人学習について、「感謝」や「工夫」を理解するだけにとどまっているという問題意識を抱いている。水利権の利害調整という社会的な見方を取り入れたとしているが、この授業でも問題を克服するには至っていない。なぜなら、そもそも「水争い」は当時の社会的事象として学習するようになっているからである。水争いが死活問題だったからこそ、水路建設が偉業とされるのである。先述のような教科書内容を組み替えたに過ぎないのである。当時の水争いの様子について調べた学習でも十分に代替可能である。

このように、教科書内容に基づく授業や、笠が開発した授業は、学習者の社会形成への関わりを欠いたものであると言わざるを得ない。

1-2 行為と状況とを切り離している授業分析

人物の行為に基づく歴史学習では寺尾健夫の研究が参考となる。寺尾はDBQプロジェクト(Document Based Questions Project)の授業をS・トゥールミンの議論レイアウトに当てはめながら分析し、人物の行為を解釈するモデルを導き出している。寺尾はそれを、史料批判型社会的人物学習と呼び、「議論の構造を基にした批判的方法を用いて、社会的に(他の学習者との関係において)歴史上の人物の行為と出来事の間を関係性を理解させるものである」⁷⁾と述べている。

寺尾はDBQプロジェクトの中で、単元「非暴力主義：ガンジー・キング・マンデラ～何が非暴力主義を実現させたのか」(世界史

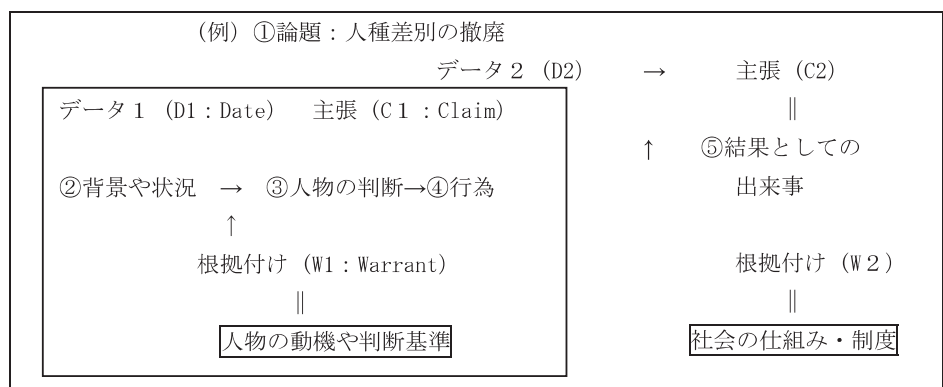


図1 行為の批判的解釈モデル⁸⁾

単元)を取り上げて分析を行っている。この学習では、ガンジーらの非暴力主義がいかにして実現したのかを「人物の行為」、「人物の行為と出来事との関係」、「出来事と時代の特色との関係」の観点で追及することが行われているとしている。それを解釈する枠組みとして、「行為の批判的解釈モデル」と呼ぶものを提示している(図1を参照)。

この解釈モデルはトゥールミンの議論のレイアウトを基にしたものである。寺尾によれば、内側の囲みは人物の行為の解釈の過程であり、外囲みは人物の行為と出来事との関係を考えさせるものであるとしている。そのようなモデルが複合的構造をもち、何層にも重なることで、人物の行為を出来事と関連付けた動的な理解ができるとしている。

例えば、ガンジーの非暴力主義の成功の1つに挙げられる「塩の行進」がどのように達成されたのかを、寺尾はこのモデルで説明している。それによると、「当時のインドは塩の自家生産をすることができず、英国に専売されている状況であったため、ガンジーはインドが経済的自立を達成するために、インド人自身が塩を作る必要があると判断し、塩の行進をインド国民に呼びかけた。その結果、英国に経済的打撃を与えることになった」という意見が作成されることになる。つまり、出来事と関連付けて人物は行為を行っているという構造を明らかにしようとしているのである。

ところが、寺尾の解釈モデルは、個人の内面に、行為の原因を求めることになっている。つまり、個人がある判断をすれば、それに応じた行為が選択され、実行されるという解釈である図1の③と④を結ぶ矢印が因果関係のように成立しているのである。そこでは、周囲の状況との関係を切り離しているのである。例えば、佐長は「個人の内面の知識や規範、『感情』や『意志力』だけではなく、個人がおかれている状況(周囲の物や情報、及び多数の他者との関係)が社会的行動を可能にしている」⁹⁾と述べている。つまり、ある判断や行為は、その人物の内面において形成された考え方(人物の動機や判断基準)にしたがって行われたとされているが、判断や行為は、置かれた状況によって構成されるのである。しかし、寺尾の解釈モデルでは、他の状況は想定されず、結果として成し遂げられた「成功物語」を、個人を単位に分析しているだけなのである。

具体的にみてみよう。ガンジーが「塩の行進」を行ったのは、塩が英国に専売されているため、経済的に苦しい状況にあり、インド人が自分たちで塩を作る必要があるとガンジーが判断したからであるとしている。しかし、それだけで「塩の行進」は本当に成し遂げられたのか。それを受け入れるならば、先述した状況や条件がそろえば、誰もが「塩の行進」を行うことになる。しかし、実際には、英国の厳しい管理や統制があり、そのような行為は困難である。だからこそ、ガンジーの行為は称賛されるのである。寺尾は塩が英国に専売されていることを「状況」としているが、それはガンジーの行為を導いた当時の状況の1つであり、行為を決定づけるものではない。むしろ、そのような行為を可能にした、ガンジーのそれまでの生き方が多くの人々に支持されていたという事実や、ガンジーに協力しようとする人や理解を示す人々などのネットワークに目を向けるべきであろう。多数の人々が結ぶネットワークという状況がなければ、ガンジーはそもそも行動を起こしたくてもできなかったであろう。

このように、個人を単位にした分析は個人の外部を見失わせているのである。したがって、寺尾の解釈モデルは人物の周囲の状況との関係を捉えていないため、特定の人物の業績についての理解は不十分なものであるといえる。

2. 状況行為論による先人学習の原理

2-1 社会的相互行為を視点とした行為の分析

状況行為論に依拠すれば、行為は、行為が埋め込まれた環境との相互作用によってなされるとみる。サッチマンは「状況的行為(situated action)」という用語について、「すべての行為のコースは、本質的なあり方で、物質的・社会的な周辺環境(circumstances)に依存したものだ」という見方を強調する¹⁰⁾と述べている。つまり、ある人物の行為や判断も周辺環境との関係において成立するといえる。それは、個人とそれを取り巻く状況を一体として捉えるため、状況を無視した行為の理解はあり得ないということになる。そのため、先人の偉業を称えるよりも、状況を構成する多くの要素が関係し、結びつくことによってその偉業を成し得たことを検討させる必要がある。佐長は「相互行為とは、繰り返すようだが、複数の人々の間で物や言葉をやりとりすることである。したがって、人々の間におけることを強調するならば『社会的』という言葉

葉を加えて『社会的相互作用』と呼ぶべきである¹¹⁾と述べている。つまり、状況行為論に従うと、関係する多数の人々をはじめとして、社会的環境に分散している要素が互いに結ばれ、それらをリソースとする行為がなされたという見方をすることになるのである。

こうして図2のように、先人の行為を成立させる要素を図式化し、分析する。ここに挙げる要素とは、行為を成立させる「ひと・もの・こと」とする。「ひと」とは事業に関わる人々であり、「もの」とは道具や物理的環境であり、「こと」とは知識や情報、技術、制度等を指す。

ただし、この図式では、中心に据える要素は確定されず、各要素間の結びつきも、その関係性によって変わってくる¹²⁾。なぜなら、状況によって要素の切り取り方が異なるからである。先の布田保之助の場合であれば、図3のようになる。

これらの要素のどれかを欠くと、行為が成立しない、あるいは、異なる行為になるのである。以上の状況行為論を1つ目の学習原理とする。

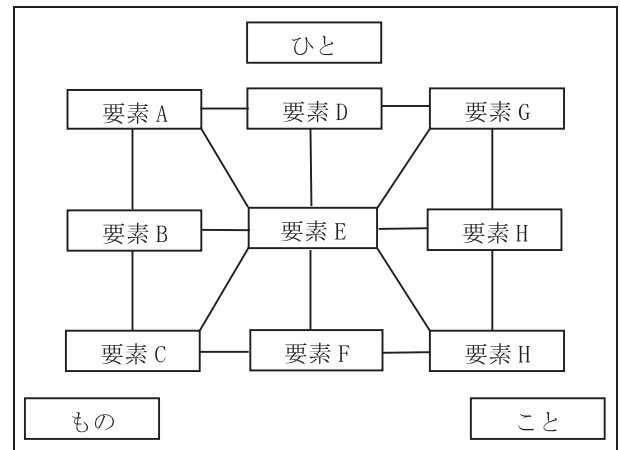


図2 行為を成立させる要素のモデル

2-2 社会参加の仕方の選択

先人学習は先人の働きを対象として学習する。しかし、目的は市民社会の一員である市民になることにある。したがって、学習者は先人の働きを通して社会参加を学習しなければならない。1つ目の原理で明らかにした関係図に基づき、そこに関わる先人たちはどのような関わりしていたのかを抽出し、その関わり方や生き方を学習者が学び、選択することが2つ目の原理である。

図3に従って、考えてみる。通潤橋建設に関わる人々は布田保之助や橋本勘五郎、石工集団、協力する村人たちである。布田保之助は通潤橋事業の管理・運営を行う立場のリーダー的人物といえるだろう。橋本勘五郎や石工集団は技術者という立場、協力する村人たちは、リーダー的人物を支える立場であるといえよう。つまり、通潤橋事業と言う社会的行為に対して、「管理運営を行うような社会への関わり方」、「技術を提供するような社会への関わり方」、「リーダー的人物を支え、協力していくような社会への関わり方」等の関わり方を見出すことができる。したがって、学習者はこれらの関わり方の中から、自分自身を取り巻く状況や考え方等との関係の中で選び取っていくのである。

従来の先人学習では、個人としての先人を学習対象としているため、社会への関わり方や生き方は、「その先人のように」振る舞うことが求められていたといえる。つまり、学習者は先人に少しでも近づくような努力を要求されていたのである。しかし、状況行為論の立場から見れば、

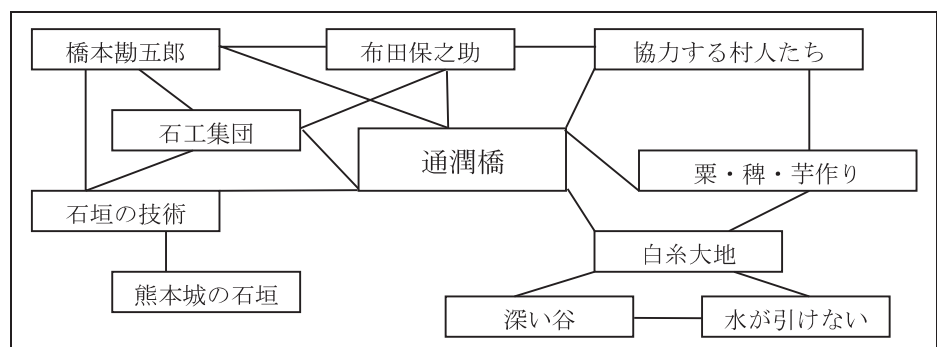


図3 通潤橋建設における行為の要素

このような学習は否定せざるを得ない。誰もが先人になることはできないし、そもそも、社会は多様な役割を持つ、多くの人々によって形成されているのである。そのような人々の多様な社会への参加的な関わり方にこそ目を向けるべきである。

3. 授業開発の実際—小学校第4学年単元「成富兵庫茂安の治水事業に学ぶ」—

3-1 単元の概要

成富兵庫茂安は1560年（永禄3年）に現在の佐賀市鍋島に生まれ、佐賀藩の武士として活躍した。茂安の

功績の中で最も大きなものは治水事業である。石井樋（佐賀市）や永池の堤（武雄市）等、佐賀県内で百箇所を超える工事に携わった。それらの工事によって、人々のくらは大いに豊かになった。

茂安の死後、人々は茂安の功績を称え、白石神社（みやき町）に祀っている。また、茂安の名前を冠した地名が県内各地（佐賀市兵庫町、北茂安町：現みやき町）にみられる。茂安は佐賀地域の発展において欠かすことができない偉人として、人々に語り継がれているのである。

一方で、茂安に対して厳しい評価もある。筑後川を挟んで東隣に位置する久留米藩（現福岡県久留米市）におけることである。農政家の佐藤信淵が久留米藩に献策した『論筑後河水害』13)には「人作の一害」と記述されている。これは、筑後川の治水事業において、茂安が千栗土居（堤防）を建設することで、筑後川の水が氾濫したときに久留米藩領内に水が流れ込むことになったという記述である。また、茂安は蛤水道を建設することで、田手川（佐賀県吉野ヶ里町）に水を引くことに成功したが、それによって隣国の福岡藩側にある那珂川への水量を減らす事態を招いている。

このように、地域の偉人とされる成富兵庫茂安も、選び取る状況によって、評価は異なってくるのである。そこで、成富兵庫茂安や、彼の治水事業を調べることで、それに関する要素を挙げていく。それらの要素を互い結びつけることで、成富兵庫茂安という個人だけが治水事業を成し遂げたわけではないことを明らかにする。具体的な事例としては、千栗土居の建設を取り上げる。この事業では、長い年月と人々の協力、事業を可能にした土木技術など、様々な要素を捉えやすいからである。その上で、事業に関わった人々の社会への参加的な関わり方を描出し、学習者に、自分はどうのような関わり方をすべきか、という問いを与え、選択させるようにする。学習者は自分の志向や価値観等に照らして判断する。

3-2 単元の目標と指導計画（5時間）

成富兵庫茂安の治水事業と人々に与えた影響を理解する。その上で、千栗土居建設を事例に、成富兵庫茂安の行為を分析し、その状況を明らかにする。明らかになった状況から、関わった人々の社会への関わり方を抽出し、学習者が自分自身の状況や考えに応じて、社会への参加的な関わり方を選択し、主張することができる。単元の指導計画は5時間である。

3-3 各時間の学習指導案

教師の指導言	教授学習過程	資料	学習者の発言及び学習活動
<p>1 成富兵庫茂安についての理解</p> <ul style="list-style-type: none"> これは筑後川沿いに建てられている記念碑である。何のために建てられているのか。 碑には人名が書かれている。何と書かれているか。 この人物の名前が佐賀県内の地名になっている。どこがあるか。 成富兵庫茂安とはどのような人物か。 <p>○成富兵庫茂安は佐賀県に多大な貢献をした人物である。どのような人物なのかを資料で調べよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> いつ頃に活躍した人物か。 どこに仕えたのか。 どのような人物であったか。 	<p>T：発問</p> <p>T：資料提示</p> <p>P：応答</p> <p>T：発問</p> <p>P：応答</p> <p>T：発問</p> <p>T：資料提示</p> <p>P：応答</p> <p>T：発問</p> <p>P：応答</p> <p>T：説明</p> <p>T：指示</p> <p>T：発問</p> <p>P：資料読解</p> <p>P：応答</p> <p>T：発問</p> <p>P：資料読解</p> <p>P：応答</p> <p>T：発問</p>	<p>①</p> <p>②</p> <p>③</p> <p>③</p>	<ul style="list-style-type: none"> 知らない。 「成富兵庫茂安」と書かれている。 佐賀市兵庫町、北茂安町、南茂安村（北茂安町はみやき町へ、南茂安村は後に三根町となり、みやき町に合併） 知らない。 1560年に生まれた。約400年前に活躍した人物である。 今の佐賀県になる、肥前国の龍造寺家である。後に鍋島家に仕えた。 戦に強い人物だった。大きな戦にも参加

<p>・戦以外にどのような活躍をしたのか。</p> <p>・治水事業とはどのようなことか。</p> <p>・治水事業のため、成富兵庫茂安は何と呼ばれているか。</p> <p>・なぜ、そのように呼ばれているのか。</p> <p>・それでは、最初に質問したように、記念碑が建てられたのは、なぜだと考えられるか。</p> <p>・この記念碑は千栗土居という堤防を築いたことを称える記念碑である。これから、成富兵庫茂安がどのような働きをしたのかを学習していく。</p>	<p>P：資料読解 P：応答 T：発問 P：資料読解 P：応答 T：発問 P：資料読解 P：応答 T：発問 P：資料読解 P：応答 T：発問 P：資料読解 P：応答 T：発問 P：応答 T：説明</p>	<p>③</p> <p>③</p> <p>③</p> <p>③</p> <p>③</p> <p>③</p>	<p>して活躍した。また、治水事業に役立つ学問も学んだ。</p> <p>・城づくりや治水事業である。</p> <p>・洪水を防いだり、川の水を引いたりする仕事。</p> <p>・「水の神様」と呼ばれている。</p> <p>・治水事業で多くの人々の役に立ったから。</p> <p>・成富兵庫茂安は治水事業で佐賀県に多大な貢献をしたため、その功績を称えて、記念碑を建てている。</p>
<p>2 成富兵庫茂安の治水事業とその影響についての理解</p> <p>○成富兵庫茂安が行った治水事業とはどのようなものかを調べよう。</p> <p>・なぜ、治水事業は必要だったのか。</p> <p>・成富兵庫茂安はいつから治水事業に取り組み始めたのか。</p> <p>・どれくらいの数の治水事業を行ったのか。</p> <p>・主な治水事業にはどのようなものがあるか。事業名と場所、その影響を調べてまとめなさい。まとめたら発表しなさい。</p>	<p>T：発問 T：発問 P：資料読解 P：応答 T：発問 P：資料読解 P：応答 T：発問 P：資料読解 P：応答 T：指示 P：作業 P：発表</p>	<p>④</p> <p>④</p> <p>④</p> <p>⑤</p>	<p>・当時は大雨による洪水や日照りによる水不足が各地で起きていたから。安全で安定した暮らしを築くために藩主を説得して事業を行った。</p> <p>・1610年の50歳ぐらいから治水事業に取り組み始めた。</p> <p>・佐賀藩の各地で、100ヵ所以上の工事を行った。</p> <p><主な治水事業名、場所、影響></p> <p>①「千栗土居」（みやき町） 筑後川の洪水から田畑を守った。</p> <p>②「蛤水道」（吉野ヶ里町） 田手川の水不足を解消させた。</p> <p>③「石井樋」（佐賀市） 佐賀城下に水を引き込んだ。</p> <p>④永池の堤（武雄市） 農業用水を確保した。</p> <p>⑤「桃ノ川水路」（伊万里市） 川の水が引けない土地に水を引いた。</p>

<ul style="list-style-type: none"> これらの治水事業で人々の暮らしはどのようになったといえるか。 成富兵庫茂安についてどのように思うか。 	<p>T：発問 P：応答 T：発問 P：応答</p>		<ul style="list-style-type: none"> 暮らしが楽になった。 洪水や水不足の心配が少なくなった。 人々の生活をよくした、優れた人物である。
<p>3 成富兵庫茂安に対する見方の検討</p> <p>○これまでの学習では今日の佐賀県（あるいは当時の佐賀藩）による見方をしてきた。しかし、異なる状況を設ければ、異なる見方が可能となる。異なる見方から、成富兵庫茂安を検討してみよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ①「千栗土居」に関して、隣国の久留米藩の記録では成富兵庫茂安は何と書かれているか。 なぜ、そのように書かれているのか。 久留米藩はどのような対応をしたか。 ②「蛤水道」に関して、どこの藩と争いが生じたのか。 どのような争いか。 治水事業に関する当時の考え方についての資料を読みなさい。どのようなことが分かるか。 これらのことを踏まえると成富兵庫茂安についてどのように思うか。 なぜ、成富兵庫茂安に対する評価が分かれるのか。 先人の働きに対する評価は状況によって見方が異なる。状況との関係において先人の働きを捉え直す必要がある。次時では「千栗土居」を例にして、その状況を明らかにする。 	<p>T：説明 T：発問</p> <p>T：発問 P：資料読解 P：応答 T：発問 P：資料読解 P：応答 T：発問 P：資料読解 P：応答 T：発問 P：資料読解 P：応答 T：発問 P：資料読解 P：応答 T：発問 P：資料読解 P：応答 T：発問 P：資料読解 P：応答 T：発問 P：資料読解 P：応答 T：説明</p>	<p>⑥</p> <p>⑥</p> <p>⑥</p> <p>⑦</p> <p>⑦</p> <p>⑧</p>	<ul style="list-style-type: none"> 「悪兵庫」と書かれている。 千栗土居が建設されたことで、筑後川の反対側に位置する久留米藩に水が流れ込むようになったから。 安武堤防を作って川水を佐賀藩側に跳ね返そうとした。 佐賀藩の北隣の福岡藩である。 福岡藩側の川から佐賀藩側に水を引いたための水争いである。 当時は自国領内をいかに統治するかが最も重要であった。自国以外は他国であるため、今日のような「隣の県」という考え方はなかった。 分からない。 佐賀藩のために努力した優れた人物である。 他藩が言うように、よくない人物である。 治水事業による影響の受け方が異なっているから。
<p>4 千栗土居建設の状況分析</p> <p>○佐賀県民は成富兵庫茂安を郷土の偉人として称えてきた。それはどのような状況において成立するのか。代表的な治水事業である</p>			

<p>「千栗土居」を例に考えよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> •なぜ、千栗土居を建設することになったのか。 •千栗土居の工事はどのようなものか。 •どのような工夫がなされているか。 •かかった年月はどれくらいか。 •なぜ、そのような時間がかかったのか。 •人々は今日まで、成富兵庫茂安の功績を称えているが、それは彼自身の能力で実現したのか。 •他の協力する人たちとはどのような人たちなのか。また、どのようなものが千栗土居建設を実現させたのか。関係するものを調べて、ノートに記入しなさい。 •発表しなさい。 •これらの内容を関係図に表そう。 •千栗土居建設に最も重要な「人、もの、こと、」はどれか。 •それは、なぜか。 •千栗土居建設はどのような状況において功績として称えられているのか。 •千栗土居建設の事例のように、成富兵庫茂安だけでなく、他の事例も同じ比重で捉える見方が考えられる。 	<p>T : 発問 P : 資料読解 P : 応答 T : 発問 P : 資料読解 P : 応答 T : 発問 P : 資料読解 P : 応答 T : 発問 P : 資料読解 P : 応答 T : 発問 P : 資料読解 P : 応答 T : 発問 P : 資料読解 P : 応答 T : 発問 T : 指示 P : 作業 T : 指示 P : 発表 T : 発問 P : 応答 T : 発問 P : 応答 T : 発問 P : 応答 T : 説明</p>	<p>⑨ ⑨ ⑨ ⑨ ⑨ ⑨ ⑨ ⑨</p>	<ul style="list-style-type: none"> •筑後川は曲がりくねって、大雨になると毎年洪水になり、家屋や作物に大きな被害が出ていた。 •筑後川沿いに長さ12km、幅54m、高さ7.5mの堤防を築いた。 •水が染み込まない土台をつくった。 •植物を植えて強度を高めた。 •遊水地を設けて水をためるようにした。 •12年かかった。 •農民に負担をかけないようにするために、農閑期に工事を行ったため。 •成富兵庫茂安だけでは実現できない。 •資料を基に作業する。 •筑後川が毎年のように洪水を起こしていたこと。 •流域の村人たち。 •佐賀藩の藩主。 •成富兵庫茂安の家来。 •堤防作りの技術者集団。 •成富兵庫茂安自身の知識や指導力。 •堤防の技術。 •関係図に表す(図4を参照)。 •決められない。どれか1つだけを取り上げることはできない。 •それぞれの人やものなどが結び付いて千栗土居建設を実現させたから。 •関係図にあるような、多くの「人、もの、こと」が結び付いて実現したものといえる。 •図4を参照。
<p>5 社会への参加的な関わり方の抽出と選択 ○千栗土居建設に関わることを社</p>	<p>T : 説明</p>		

<p>会への参加的に関わることをとする。そのように捉えるならば、関係図にある人々はどのような関わり方をしたのか考えよう。そして、自分は社会とどのように関わっていくのかを考えよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・成富兵庫茂安は、どのような関わり方をしたといえるか。 ・そのような捉え方で、他の人々の関わり方をみてみよう。 ・多くの人々が多様な関わり方をすることで、社会はつくられている。自分はどのような関わり方を選択するのか。今の自分自身の状況(価値観や性格、好み、将来の夢等)に照らして選択し、ノートに書きなさい。書いたら発表しなさい。 	<p>T：発問 P：応答</p> <p>T：発問 P：応答</p> <p>T：指示 P：作業 P：発表</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・多くの人々を動かして、管理・運営をするなど、指導者的に社会に関わったといえる。 ・流域の村人→指導者的な立場の人物を支える関わり方。 ・家来たち→指導者的な立場の人物を近くで支える関わり方。 ・技術者集団→工事を可能にするような技術を提供することによる関わり方。 ・藩主→指導的立場の人物を全面的に支える関わり方。 <p><記述例></p> <p>【成富兵庫茂安を選んだ場合】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私は成富兵庫茂安のような社会への関わり方をしたい。なぜなら、指導者的な立場で、多くの人たちと関わり合うことに魅力を感じ、人のためになるようなことをしたいからである。 <p>【技術者集団を選んだ場合】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私は技術者集団のような社会への関わり方をしたい。なぜなら、技術を高め、それらを使って何かを作り上げることに魅力を感じ、そのような形で社会に貢献したいからである。
--	---	--

【資料】

- ①「成富兵庫茂安公記念碑の写真」筑後川沿いに建てられている記念碑を筆者が撮影した自作資料。
- ②「佐賀県内の地名」佐賀県の現市町名及び旧市町村名が記入して自作した佐賀県の地図。
- ③「成富兵庫茂安の生涯」佐賀県小学校教育研究会社会科部会編、2011、『わたしたちの佐賀県』p. 110。
- ④「成富兵庫茂安の治水事業」同上③、p. 110。
- ⑤「成富兵庫茂安が関わった主な治水事業」、同上③、p. 110。
- ⑥「千栗土居建設に対する久留米藩の様子」、さが水ものがたり館長の荒巻軍治先生の講演記録や本人へのインタビューをもとに作成した自作資料。
- ⑦「蛤水道建設に対する福岡藩の様子」同上。
- ⑧「治水工事についての当時の考え方」、宮地米蔵「成富兵庫覚え書き」
- ⑨「千栗土居建設の様子」同上③、pp. 110-111。

4. 授業実践とその考察

4-1 社会的相互作用を視点とする行為のリソースの分析についての結果と考察

授業実践第7時目の(プランの第4時目の後半部分)「千栗土居の建設」を「ひと・もの・こと」を視点

としてリソースとなる要素を取り上げ、その関係を捉えさせる場面である。資料の挿絵から、その場面で働いている人々や関わっている人たちの様子や使用している道具などに着目させ、「ひと・もの・こと」の視点から要素を導きだし、互いの関係を線で結び、図4のような関係図を作成した。また、その関係図と資料①の成富兵庫茂安の記念碑の写真とを並べて提示することによって、「千栗土居建設は成富兵庫茂安という優れた個人によって成し遂げられた」という見方を解体するようにした。その場面の授業記録の一部を引用する。

T：「千栗土居をつくるのに、一番大事なものは何と聞かれたら何て答える？」

C1：洪水が起きる。技術。茂安。

T：この中で一番大事な人、ものとか…。

C2：人は茂安で、ものは技術で、ことは洪水。

T：一番大事なものは？それとも決められる？

C3：決められない。どれもいる。

T：茂安が一番大事なら、茂安さんだけいけばいい？

C4：もの、材料とかいる。

T：技術が必要という人は、技術があればいいの？

C5：人と材料がいる。

千栗土居を建設するためには成富兵庫茂安だけではなく、技術や道具が必要であることに気付いていることが、学習者の発言から読み取ることができる。それらが互いに必要であるからこそ、どれが一番大事なのかを決めることができなかつたといえる。さらに、関係図と成富兵庫茂安の記念碑の写真とを並べて提示した場面での、次の学習者C8の発言に注目する。授業記録の一部を引用する。

T：これ、授業の初めにみせたもの、何だっけ。

C6：茂安の記念碑。

T：茂安の記念碑だね。これだったら、千栗土居を建設したのは？

C7：成富兵庫。

T：そうだね。だから400年経った今でも名前を覚えているんだね。けど、こうやって見てみたらどう思う？

C8：なんか村の人が…。

T：C8さん、もうちょっと（大きな声で言うように促す）…どうぞ。

C8：村の人、工事をする人…。

学習者C8の発言で、「村の人」が出てきている。この発言から、千栗土居建設は成富兵庫茂安だけではなく、他に多くの人に関わっていることに目を向けるようになったと考えられる。すなわち、成富兵庫茂安の記念碑の背後に、関わった多くの「ひと・もの・こと」に考えを巡らせるようになったといえる。これにより、治水事業を個人による達成から、多くの要素がリソースとして結び付いたことでなし得た事業という見方をすることができたことが分かる。

4-2 社会参加の仕方の選択についての結果と考察

授業実践第9時目（プランの第5時目）で社会参加の仕方について学習者に主張文を作成させた。治水事業に果たした人々の役割を選択することで、どのように社会に関わるのかを考えさせるようにしたのである。図4の関係図から役割を抽出し、それらの中から自分の志向や家族の職業、将来の目標等と関係付けて、その理由を記述させた。次のようになる。

役割	人数	割合
リーダー的役割	3人	9%
リーダーを支える役割	8人	26%
アイデアを作ったりアドバイスしたりする役割	11人	34%
お金や人を集めてリーダーを支える役割	0人	0%
実際に行動する役割	10人	31%

図4 学習者が選んだ役割の人数と割合

この結果では、学習者は主にリーダーを支える役割、アイデアやアドバイスをする役割、実際に行動する役割を選択している。例えば、リーダーを支える役割を選択する学習者の主張文は以下の通りである。

わたしは、家来みたいにリーダーを支える役割を選びました。その理由を説明します。わたしは、茂安みたいにリーダー的役割は、することはできないけど、家来みたいにリーダーを支えることはきっとできます。リーダーはしっばいなどをすると、工事をする人などにまた作りなおさなければいけないし、村の人たちにもめいわくをかけてしまうので、茂安みたいになることはできないと思います。家来みたいになったら、リーダーにめいわくをかけないで、リーダーがこまっていたら家来がたすけられるところまでたすけたいと思っています。家来になったらきっといろいろみんなになにかを伝えたりするのでたいへんそうです。

この主張文では、自分の志向と照らし合わせ、役割を選んだ様子が読み取れる。「茂安みたいにリーダー的役割は、することはできないけど」とある。自分の考え方や置かれている状況から、どのように社会と関わるのかを、人を支えたり、直接的に何かを行ったりすることで、それを果たそうとする考えを持つようになったことが分かる。他にも、千栗土居建設の関係図を自動車作りに見立てて、自分の将来の夢と照らし合わせて考えている場合もある。次のような主張文である。

ぼくはアイデアを作ったりアドバイスしたりする設計の役割を選びます。その理由を説明します。ぼくは車が好きです。組み立てる人、工場を管理する人、などの中からぼくは設計する人を選びました。設計する人はぼくの「ゆめ」だったからです。「組み立てる人もいいな」と思ったのですが、やっぱり設計かなと思いました。なぜなら、組み立てる人なら同じものをずっとつくり続けたいといけませんが、設計する人なら自由に世の中を変えることが出来るから「設計する人」を選びました。それに、設計ならたくさん頭を使うからです。「どうすればこうなるか」「どうやったらボディをカッコよくできないか」などいろいろなことを考えられるから設計を選びました。将来設計する人になれたらいいなと思います。

ここでは、「組み立てる人、工場を管理する人、などの中からぼくは設計する人を選びました」とあるように、自動車づくりに関わる人の役割を抽出し、自分なりの関わり方を選択することができている。しかも、「設計する人なら自由に世の中を変えることが出来るから『設計する人』を選びました」とあるように、成富兵庫のように何かリーダー的な役割を担わなくても、社会を変えることができると、この学習者は考えている。すなわち、技術などから世の中に対して働きかけ、変えていくことができるという考えをもつようになったといえる。

一方で、リーダー的役割とお金や人を集めてリーダーを支える役割を選んだ学習者はそれぞれ3人（9%）と0人（0%）であった。リーダー的役割を選択しなかったのは、学習者には集団を引っ張っていくことが想像しにくかったと推測される。一方、従来先の学習者は、学習者に対してこの役割を担うことを期待した学習であったといえる。それは学習者の実態にはそぐわない可能性もこの結果から、うかがうことができる。

したがって、従来の「尊敬・崇拝の偉人学習」では、先人のように優れた能力を身に付けることで社会を変えるという見方になるが、本授業は異なる。すなわち、先人以外の関わり方でも社会参加し、社会を変えることが出来るという見方が可能になる、ということが明らかになった。

おわりに

本小論では、状況行為論の立場から、特に社会的相互作用の見方を採用することで、従来の「尊敬・崇拜する先人学習」から「社会参加の仕方を学ぶ先人学習」に再構成することを主張してきた。

従来の「尊敬・崇拜する先人学習」では、対象となる先人のようになることを目指してきた。つまり、特定の人物を「お手本」とし、そのように振る舞うことを求めてきたといえる。しかし、すべての学習者が、そのようになることはできないのである。また、そうなる必要もないのである。

そこで、本小論ではそのようなアプローチを否定し、決定的に異なるアプローチを採用した。すなわち、その人物の外部へと学習の対象を広げ、人物の周辺環境を構成する要素に目を向けさせるのである。すると、それぞれの役割に応じた社会参加の仕方がみえてくるのである。このような見方は、「みんなのおかげ」という見方とも決定的に異なる。それは行為と状況とを一体化し、各要素の関係性の総体として行為をみるのであり、各要素間の相互作用を重視するからである。「みんなのおかげ」という見方は要素間の相互作用を無視し、全てを一括りにした見方になってしまうのである。様々な人間が関係を結び、それぞれの役割を担うことで社会はつくられているのである。そのような社会参加の仕方こそ、市民として学ぶべきことなのである。

しかし、課題も残る。社会参加の仕方を選択することで、現在の社会をどのようにするのかという点については十分に論じることができなかった。社会の現在との関係において、その社会参加の仕方を捉えさせるようにしたい。

なお、本小論は、次のようにして成った。田本嘉昭が理論及び授業構成、授業考察を作成し、田本正一が部分的に内容を加筆・修正し、完成させていることを付記しておく。

引用・参考文献

- 1) ルーシー・A・サッチマン (佐伯胖監訳) (2009) : プランと状況的行為 人間 - 機械コミュニケーションの可能性一, 産業図書.
- 2) 東京書籍 (2014) : 新しい社会 3・4 下, pp. 102-121.
- 3) 佐長健司 (2003) : 社会科授業の民主主義論的検討, 社会科研究, 第59号, pp. 21-30.
- 4) 5) 佐長健司 (2003) : 前掲 3) , p. 26.
- 6) 笠聡一郎 (2005) : 水利権問題に着目した「開発单元」の教材化 「湯の口ため池」の実践を通して, 社会科教育論叢, 第44集, pp. 15-19.
- 7) 寺尾健夫 (2014) : 人物の行為の批判的解釈に基づく歴史学習の論理 DBQプロジェクト单元「非暴力主義: ガンジー・キング・マンデラ」の場合, 福井大学教育地域科学部紀要, 第5集, p. 214.
- 8) 寺尾健夫 (2014) : 前掲 7) , p. 230.
- 9) 佐長健司 (2014) : 社会的相互行為の中の知識 中学校社会科授業における学習者のナラティブから, 社会科教育研究, 第121号, p. 43.
- 10) サッチマン (2009) : 前掲 1) , p. 49.
- 11) 佐長健司 (2014) : 前掲 9) , p. 49.
- 12) 上野直樹、土橋臣吾 (2006) : 科学技術実践のフィールドワーク ハイブリッドのデザイン, せりか書房.
ブルーノ・ラトゥール (川崎勝、平川秀幸・訳) (2007) : 科学論の实在 パンドラの希望, 産業図書.
- 13) 佐藤信淵 (1992) : 「論筑後川水害」, 滝本誠一編『佐藤信淵全集下』岩波書店, p. 751.